

韓国社会における在日朝鮮人認識の変遷

趙 慶喜

目次

はじめに

1 韓国社会の在日朝鮮人認識および政策

- 1) 棄民と監視の対象として
- 2) 民主化と「在外同胞問題」の浮上

2 「脱冷戦」期における在日朝鮮人認識

- 1) 「誇らしい韓民族」
- 2) 韓流のなかの「ザイニチ」
- 3) 朝鮮学校と「ウリ」の再／発見

おわりに

はじめに¹

2007 年の韓国社会で話題になった映画の一つに、日本の朝鮮学校を描いた『ウリハッキョ』がある。いくつかの映画祭を通じて知られはじめたこの作品は、ドキュメンタリー映画としては異例の興行記録を残し、感動を与えた映画として高く評価された。また同じ時期、それまで一部の NGO 団体の努力によって細々と続けられていた在日朝鮮人問題への取り組みは、京都のウトロ地域や東京第2 朝鮮学校に対する支援募金運動を通じて大衆参加型の運動に拡大した。在日朝鮮人に関する多くの記事やエッセイ、またインターネット掲示板への書き込みに接する

たびに、様変わりした韓国社会の姿に驚くばかりであった。

私はここで「在日朝鮮人」という呼称を「出身地や国籍や所属にかかわらず植民地支配の影響によって日本に渡ってきた朝鮮半島出身者とその子孫の総体」をあらわす語として用いているが、今日の韓国社会でこうした但し書きをとりたてて強調せねばならない場面は減ってきている。つい数年前まで「在日朝鮮人」という用語は韓国社会において「朝総連の人々」あるいは「北韓国籍者」をあらわしていた²。しかしここ数年間に「在日朝鮮人」をめぐる認識の位相は明らかに変容しつつある。自らのアイデンティティを再び確認する、あるいはディアスポラとして新たな可能性を实践するという積極的な像が、「在日朝鮮人」あるいは「ザイニチ」という語に付着しはじめている。いつからこのような認識の変化が生じたのか、またその具体的な文脈はいかなるものか。現在の韓国社会で在日朝鮮人の存在が積極的に受け容れられる要因はどこにあるのか。本稿は、こうした問いから出発し、韓国社会の在日朝鮮人認識の変遷過程を

¹ 本稿は、拙稿「韓国社会の在日朝鮮人認識」(『黄海文化』2007 年冬号)を翻訳・加筆したものである。

² 90 年代の記事を見ると、「在日朝鮮人」という呼称の前には「朝総連系」という修飾がついたり、括弧つきで(北韓国籍)と記載されていたことを確認できる(韓国で「朝総連」は在日本朝鮮人総連合会を、「北韓」は朝鮮民主主義人民共和国を意味する)。

追うことで、在日朝鮮人をめぐる韓国社会の視線とその認識の枠組みを問うことを目的とする。それはこれまで「在日朝鮮人問題」として構成されたいくつかの問いを、「韓国社会問題」へと転換させる試みでもある。

近年、韓国社会の在日朝鮮人認識に関する研究も少しずつ生まれはじめている³。まず金廣烈^{キムグワンリョク}は、韓国で共有される在日朝鮮人の姿を、学術研究、政策、言論報道、一般的認識の4つに分けて検討し、イ・ヨンシクは1990年代以降の在日朝鮮人に関する研究成果を政策、法的地位問題、民族教育、アイデンティティにわけて整理した。これらの研究からは、韓国社会の認識不足についての問題意識と省察を垣間見ることができるが、その後数年間のあいだに大衆的な次元で起きた急激な変化を新たに分析する必要があるだろう。また権赫泰^{クワンヒョクテ}は解放後の韓国社会で在日朝鮮人がいかに表象されてきたのかを、民族主義、反共主義、開発主義という三つのフィルターを通して分析した。植民地支配と分断／冷戦の過程で朝鮮半島の南側社会が内在させた視座の臨界点を的確に描いてみせた権の研究は、本稿を書く出発点となった。

本稿では、主に権が扱わなかった1990年代以降に焦点を絞り議論を進める。ただ近年の韓国

において在日朝鮮人を含んだ在外同胞問題が「談論」として浮上することになった背景を理解するために、まずはそれ以前の韓国政府と在日朝鮮人および在外同胞の関係がいかなるものであったのかを見ておくことも重要である。そのため、まず第1節の1)で、1980年代までの韓国政府の在日朝鮮人政策を先行研究を通じて整理したうえで、2)では民主化以後の韓国社会における在外同胞問題の浮上を市民運動との関わりから考察する。そして第2節では、「脱冷戦」期における韓国社会の在日朝鮮人への視線を三つに分けて分析する。

1 韓国社会の在日朝鮮人認識および政策

1) 棄民と監視の対象として

戦後日本に残留した朝鮮人が、韓国政府の政策を「棄民政策」と呼んだことはよく知られている。韓国政府自らも解放後の在外同胞政策について「国内の情勢混乱および朝鮮戦争による被害復旧に汲々としたあまり、海外同胞問題に気をまわす余裕がなかった」⁴と述べている。また学界でも朴正熙政権期の「海外移住法」制定（1962年）を除いて、80年代以前の状況を「無政策」と整理するなど、政府の立場をそのまま繰り返すような記述が多く見られる⁵。後述す

³ 金廣烈「韓国社会における在日コリアン像」『環』vol. 11, 2002年；イ・ヨンシク「解放後 在日朝鮮人へ 対し 国内研究成果と 大衆書 叙述」『韓日民族問題研究』5号、2003年；権赫泰「在日朝鮮人と韓国社会：韓国社会に在日朝鮮人を 어떻게 '表象'했는가」『歴史批評』2007年春号。

⁴ 国家安全企画部『21世紀 国家発展과 海外民族의 役割』1998年、5頁。

⁵ キム・ヨンチャン「南北韓 在外同胞政策」『民族研究』第5号、2002年；李光奎「在外同胞政策의 새로운 模索」在外同胞財団、2003年；金太基「韓国政府와 民団의 協力과 葛藤關係」『アジア太平洋地域研究』第3巻1号、2000年；イ・ジェジョン「脱冷戦과 韓国政府의 在日同胞政策 變化」『東アジア研究』

るように、政治的な民主化を通してようやく在外同胞問題に目を向けることができたという点で、こうした説明は確かに妥当でもある。実際のところ韓国における在外同胞政策史とは、その不在の歴史であった。

ただ、解放後大韓民国への帰還が困難であった中国やロシアの「同胞」たちとは異なり、植民地旧宗主国であり東アジア反共陣営に属した日本在留朝鮮人に対して、韓国政府がただ無関心なままで一貫していたわけではなかった。積極的で包摂的な在外同胞政策を展開した以北（朝鮮民主主義共和国）と比較した際に韓国政府の姿勢が消極的で排外的であるのは、対共産圏防衛という次元で政策を推進したからであろう。これは韓国社会の民主化運動の過程で、数多くの在日朝鮮人が政治犯として追われた事実にも如実にあらわれている。国家正統性の確保と体制競争という次元で在外同胞政策の展開を見ることなしに、ただ「無政策」としてまとめることは、かえって韓国政府の在日朝鮮人に対する視線を不問にし、結果的に在外同胞問題が分断体制と深い関係にあるという点を看過することになる。

解放後の朝鮮半島に二つの政府が樹立する前に、日本に在留した朝鮮人は路線の違いによって在日本朝鮮人連盟と在日本朝鮮人居留民団を結成した。1948年に南側に樹立した李承晩政権は民団を「在日僑胞を代表する唯一の団体」と

認定し、民団もまた「在日本大韓民国居留民団」と名称を変え、「大韓民国の国是を遵守する」団体であることを明らかにした。韓国政府は1949年1月14日に駐日代表部を設置し、「在外国民登録令」（1949年8月1日公布）にそって国民登録業務を準備しはじめた。日本政府の外国人登録令（1947年5月2日公布）によって「朝鮮」という記号を一律に与えられた朝鮮人に対し、それを正式に「大韓民国」に改めるという「現実的な必要」があった⁶。その後朝鮮戦争が勃発すると、当初デモンストレーションに過ぎなかった在日朝鮮人に対する義勇兵募集運動は、GHQ/SCAPと駐日代表部の介入によって、李承晩政権による戦時動員へと発展した⁷。韓国政府・駐日代表部・民団の連携によって在日朝鮮人を管理する体制の原型が李承晩政権下で形成された。

もっともこの三者が最初から協調関係にあったわけではない。1948年10月に日本を訪問した李承晩が、空港に迎えに出た民団団長の朴烈を無視し、また民団主催の歓迎会にも出席しなかったというエピソードに象徴されるように、李承晩は日本に残った朝鮮人に積極的な関心を示さなかった。かろうじて開催された演説会では日本を非難する内容で終始し、苦しい生活の

⁶ 在日本大韓国民団『民団五十年史』在日本大韓国民団 1997年、70頁。金太基の研究によれば、在外国民登録に応じた朝鮮人は1950年4月頃まで約一割に値する53,000名に過ぎなかった。金太基『戦後日本政治と在日朝鮮人問題：SCAPの対在日朝鮮人政策 1945～1952年』勁草書房、1997年、677頁。

⁷ 崔徳孝「朝鮮戦争と在日朝鮮人——義勇兵派遣の問題を中心に」同時代史学会編『朝鮮半島と日本の同時代史』日本経済評論社、2005年参照。

なか大統領を一目見ようと集まった人々は、彼の「非現実的な政治性」に失望することになったという⁸。李承晩にとって日本に住む朝鮮人は、あくまで反共と反日という政治路線に沿う限りにおいて存在しえたのであり、実際の生活問題などは視野の外であった。

1951年10月に始まった日韓協定過程において、韓国政府は日本に住む朝鮮人が大韓民国国民であることを確認しようとし、在日同胞の法的地位について日本政府と交渉を開始した⁹。その後、1954年に日本で鳩山内閣が成立し共産圏との交渉を始め、1955年5月に在日朝鮮人総連合会が結成されるなか、1955年8月には「在日韓国人の母国訪問禁止」などを宣布した¹⁰。また、同じ頃に始まった北朝鮮帰国運動（韓国では「北送運動」）を契機に大々的な「北送」反対キャンペーンを展開したが、この過程では、李承晩政権の「在日韓国人」に対する薄っぺらで消極的な姿勢を露呈させることになった。同じく「北送」反対運動をおこなっていた民団でさえ、自由党と現政府に対する不信任を表明したほどであった¹¹。

4.19 学生革命で李承晩政権が崩壊した後の張

⁸ 権逸「玄界灘을 사이에 두고: 日本 속의 南과 北」海外僑胞研究出版部、1983年、116～120頁。

⁹ 鄭日燮「在日僑胞의 法的地位」ソウル大学校出版部、1996年。しかし1952年4月に第一次会談が決裂すると、韓国政府は大村収容所に収容された「不法入国者」以外の朝鮮人の「集団帰還」を拒否している。日韓会談の経緯と大村収容所での動きについては、玄武岩「密航・大村収容所・済州島——大阪と済州島をむすぶ『密航』のネットワーク」『現代思想』2007年6月号。

¹⁰ 徐仲錫著（林哲／金美恵ほか訳）『現代朝鮮の悲劇の指導者たち——分断・統一時代の思想と行動』明石書店、2007年、158～159頁。

¹¹ 同上、162頁。

勉政権に入ると、「僑胞教育調査団」を日本に派遣し、奨学官〔教育専門公務員の呼称〕1名と教師9名を東京と京都、大阪などの韓国学校に派遣するなどの姿勢を見せはじめた¹²。李承晩政権に反対していた在日大韓青年団などの一部勢力は本国での4.19革命を積極的に支持し、民団もそれに追従するような動きを見せるが（「第3宣言」）、翌年に朴正熙による軍事クーデターがおきると、朴政権とそれに応じる民団中央との癒着関係が強まり、在日朝鮮人内部の対立は決定的になっていく。朴正熙政権下では、「母国修学制度」（1962）や「母国訪問団」（1966）などを新たに推進し、同時に民団に対する組織的な介入が強化された。具体的には日韓会談の過程で朴政権と会談内容に反対する勢力を「容共勢力」として追いやり、韓国政府と民団は緊密な協力関係を結びはじめた。1969年に外務部と中央情報部は民団組織強化と改革を考える「在日居留民団強化対策会議」をつくり、民団が「反共を基本とする対共闘争のための組織として、在日同胞社会の団結の中心となる団体」になることを求めた¹³。

経済成長を成し遂げるために日韓協定を結んだ朴政権は、矛盾があらわれはじめた独裁政権の正統性を埋めるためにしばしば間諜団事件を組織した。朴元淳は、思想的に自由奔放で民族主義的特性の強い在日同胞留学生が独裁政権

¹² 李文雄「世界の韓民族：日本」統一院、1996年、120頁。

¹³ 金太基、前掲論文、85頁。

を維持するうえで「一番のスケープゴート」であったと指摘する¹⁴。地理的な38度線のない中で暮らす在日朝鮮人たちは、韓国政府が内なる敵に仕立てあげる格好の対象であり、「韓国語の不自由な同胞」に対する一般民衆の違和感も秩序維持に十分に利用できるものであった。非分断的な様態をあらわしている在日朝鮮人の存在が、分断体制と深くかかわらざるをえない地点がここにある。

70年代維新政権が在日朝鮮人社会に介入していった、よりあからさまな理由は、政敵であった金大中が日本を訪問して維新反対活動をおこなうなかで、在日朝鮮人民主化勢力との密接な関係を持つようになるからでもあった。1973年3月21日に箱根で開かれた「民団民主化運動活動者研修会」における金大中の講演は、民主化勢力である韓国民主回復統一促進国民会議（韓民統）〔1989年から在日韓国民主統一連合（韓統連）〕結成の大きな契機となったことが知られている。しかし韓民統の結成を目前にした8月8日に金大中拉致事件が起き、その後在日同胞のあいだでは朴政権を糾弾し金大中救命運動が展開された。1978年に韓民統は「反国家団体」に登録され、会員たちは韓国国籍者でありながらも、その後25年間韓国入国が禁止された。この「反国家団体」規定は、その後金大中死刑宣告の法的根拠となるほど強力なものであった¹⁵。

他方で、「総連系同胞」たちに対する懐柔を趣旨とした母国訪問事業も同時にすすめられた。民団の資料によると、「墓参団事業」は1971年に大韓赤十字社が朝鮮赤十字社側に提案した「一千万離散家族探し運動」にさかのぼるといふ。1972年「7.4 南北共同声明」の出発点でもあった離散家族探しの一環として、南側が墓参団の相互交換を提案するが、北側がこれを拒否すると、民団は総連系在日朝鮮人に対する墓参団事業を秘密裏に推進した¹⁶。この試みが一定の成功を見せると、韓国政府はこれを持続的に実施し、血縁、地縁を通じて参加者たちの転向を誘導するよう指示を出し、その結果初期の参加者の2万名のうち70%が民団に加入したと記録された¹⁷。また「墓参団事業」の業績は、「民団と総連の人口比率が逆転することになった」¹⁸点にもあった。

韓国政府にとって在日朝鮮人とは、「親北化」を遮断するために介入すべき存在であり、政治的な利用対象以上でもそれ以下でもなかった。韓国国軍保安司令部への勤務を強いられた金丙鎮^{キムビョンジン}の言葉には、在日朝鮮人と祖国との非対称な関係が痛ましく刻まれている。

在日同胞社会の中に持ち込まれた「分断」

참고문헌 『프레스یان』 2007年6月22日。

¹⁴ 前掲『民団五十年史』, 124頁, 301頁。

¹⁷ 外務部僑民一課『僑民業務便覧』1979年, 79頁, イ・ジェジョン、前掲論文から再引用。

¹⁸ 以下の民団ホームページを参照。

http://www.mindan.org/min/min_reki23.php

¹⁴ 朴元淳『国家保安法研究2』歴史批評社、1997年、第10章参照。

¹⁵ 「分断 그날 속 在日僑胞社会②『韓統連의 眞実』 이제는

は、本国の歴史状況を、ただ受動的に受け止めさせられてきた歴史でもあった。「二つ」の祖国が在日同胞にそれぞれの踏み絵を用意し、「反共か、共産主義か」を選択させつづけてきた。ソウルとピョンヤンが勝手気ままに在日同胞をイデオロギーで色塗りしてきただけで、今の在日同胞は、終始、本国権力の将棋の駒だったのだ¹⁹。

1981年に船出した全斗煥政権に入ると、大韓民国憲法には「海外同胞たちの権利と利益を保護する」という在外国民条項が新たに加えられ、ソウルオリンピック誘致に向けた海外同胞たちの母国訪問と寄付活動などが広く奨励された。民団の後援会からは100億円にのぼる寄付金が送られたことが記されている。オリンピックを目前にした1987年11月16日、東京では2日間にわたって「海外韓民族代表者会議」が開催された。民団主導のもとで「祖国の平和統一と21世紀を展望した海外同胞の役割」という主題を掲げて結成されたこの会議は、共産圏をのぞいた31カ国から303名が参加した²⁰。オリンピックの成功という「全同胞的事業」に向けて、民団指導部と韓国政府はかつてないほど安定的な関係を結んでいったといえることができる。

2) 民主化と「在外同胞問題」の浮上

社会主義諸国の崩壊とグローバル化の進展は韓国社会に多くの変化をもたらした。1990年に旧ソ連と、1992年に中国と国交を結び、それまで韓国社会で忘れられた存在であった同胞たちの姿があらわれはじめた。1990年に232万99名であった「在外同胞」の統計数は、新たな同胞たちが加わることで、1991年には2倍以上の483万2414名に増加した²¹。何よりも韓国社会の民主化は、「在外同胞」自身にとっても母国との関係を新たににつくっていく契機となった。

1993年に誕生した金泳三政権は、「僑胞の世界市民化」を掲げて「新僑胞政策」を発表した。冷戦体制が弱まるなか、「南北統一までを視野に入れた新たな僑胞政策を樹立する必要」を感じた韓国政府は、居住国での安定的な経済・社会的生活の確立と同時に母国との精神的紐帯を強化するという方針を立て、それにそった政策推進を約束した²²。

1996年には国務総理の傘下に「在外同胞政策委員会」を設置し、その後、公約であった「僑民庁」新設が困難になると、1997年に「在外同胞財団」を設立した。これまで政府レベルでも「海外僑胞」「海外韓人」「在外同胞」「僑民」など恣意的に呼んでいた名称を「在外同胞」に整理し、韓国社会の在外同胞政策はようやく一定の体系を持つことになった²³。

²¹ (韓国) 外交通商部『在外同胞現況』2001年、26頁。

²² (韓国) 『外交白書』1994年、220～221頁。

²³ 在外同胞政策委員会と在外同胞財団の設置は、一般的には、これまで複数の部署にまたがっていた在外同胞業務を「有機的に総合的に処理できる道を開き」、「政策樹立および執行の過程

¹⁹ 金丙鎮『保安司：韓国国軍保安司令部での体験』晩聲社、1988年、31頁。

²⁰ 前掲『民団五十年史』、322頁。

こうした政府レベルでの変化は市民社会の発展とともに進展した。1987年6月抗争を頂点とする1980年代の民主化過程を経て、国家権力から一定の自律性を持った合法的空間が生まれた。穏健なかたちの社会運動、つまり反独裁民主化運動を主導した「民衆運動」とは区別される「市民運動」の生成過程で、これまで看過されてきた環境、女性、人権などの新たな 이슈が組上に上げられた²⁴。しかし市民運動の生成期に在外同胞問題が「談論」として浮上した痕跡は見当たらない。「在外同胞」たちはあくまで民主化と統一運動に寄与する力量としてのみ看做されたし、そうした状況は90年代後半まで続いたと見られる²⁵。

90年代後半に入り市民運動内部に多様な分化現象が生まれるなかで、在外同胞問題を人権の観点から見る活動があらわれはじめる。代表的なものが1996年に結成された「ウリ民族助け合い本部」、そして1999年に結成された「地球村同胞連帯」(Korean International Network, 以下 KIN) のような団体である²⁶。とりわけ在外同胞、

特に在日朝鮮人にかかわる取組みを先駆的にこなってきた KIN は、韓国社会の在外同胞認識に一定の影響力を発揮してきた。

この時期に在外同胞関連の市民団体が結集・連帯した契機の一つに、「在外同胞法」改正運動がある²⁷。この法改正運動は市民団体が「在外同胞」問題に対する争点を発見し、力量を集中させた初めての運動であったと位置付けられるが、それが持続的で大衆的な運動形態を維持できたわけではなかった。この運動が市民運動として社会的広がりを持ちえなかった要因には、蓄積の不在もさることながら、「民族問題」と「人権問題」のあいだにある「在外同胞問題」の概念上の曖昧さもまた影響していた。実務者の一人は、当時、外国人労働者や性的少数者問題と比べても在外同胞問題に対する市民社会の反応はおおよそ冷淡であったと振り返っており、ここには「同胞問題はすなわち民族問題であって、これを保守的理念と看做す人権談論の影響」があったとまとめている²⁸。

他方で、この時期の政策担当者や研究者など在外同胞専門家たちの文書からは、在外同胞を

を一段階格上げした」と高く評価されたが(閣内用「時事焦点: 在外同胞政策委員会와 在外同胞財団出帆——海外同胞社会、故国과 가가워진다」『統一韓国』149号、1996年5月号)、新設の在外同胞委員会は、1998年から2004年末まで開催実績がなく有名無実の状態が続いたこと、また在外同胞財団もまた外交通商部の所属機関として、一部の親政府的な団体との交流や支援に偏重するなどの限界を見せていたことが分かる。ペ・ジウォン「在外同胞関連 市民運動団体の 活動研究: 在外同胞法改正運動을 中心으로」(KIN 政策室資料、未発表論文、2004年)。

²⁴ 曹喜松「韓国の 民主主義와 社会運動」当代、1998年；金皓起「民主主義와 韓国社会, 1945-2005」『市民과 世界』第8号、2006年、参照。

²⁵ 統一努力60年発刊委員会編『하늘길 땅길 바닷길 열어統一로: 統一努力60年』韓国統一部、2005年、参照。

²⁶ ウリ民族助け合い運動本部は、もともと食糧難が深刻になった北朝鮮に対する支援と南北交流事業を目的とした団体として

出発したが、韓国内の中国朝鮮族の詐欺被害についての相談、ロシアの高麗人たちに対する支援活動などを通じて在外同胞問題へと徐々に活動を広げていった。こうした活動は、本部傘下に設置された「在外同胞センター」(1999年)を経て、「社団法人東北アジア平和連帯」の設立(2001年)へとつながった(ホームページ www.ksm.or.kr を参照)。また KIN は、「世界の同胞たちの自発的参与に基づく進歩的ネットワーク」として、「国内同胞間の相互交流と協力を通じて各国同胞社会の平和と人権の実現、韓半島の平和的統一」に寄与することを目的にした在外同胞専門家集団として活動を続けてきた(ホームページ www.kin.or.kr を参照)。

²⁷ 「在外同胞法」およびその問題点については、金友子『「同胞」という磁場』『現代思想』2007年6月号、参照。

²⁸ ペ・ジウォン、前掲論文。

人的資源として見る視点を容易に見つけることができる。特に 1997 年に経済危機を経験した韓国社会において、在外同胞は「生存」と直結した存在であった。国家安全企画部（当時）が発刊した報告書は、「今や政府は過去の海外同胞との誤った関係を清算し、現在の通貨危機が招来した経済難局を共に乗り切っていく同伴者、韓民族の生きた資産として 550 万海外同胞の力量と潜在力を組織化できるよう支援し、活用していかねばならない」²⁹と呼びかけた。また、在外同胞問題の専門家として広く知られた李光奎は、「国が危機を迎えた時に真っ先に私たちのために献身的に支援する人々はまさに同胞」³⁰であるとして次のように述べた。

私たちの立場からいえば、海外僑胞はわが民族を居住国に伝える外交官であり、韓国製品を宣伝する外販員であり、韓国文化を宣伝する間情官〔朝鮮時代末期に外国人を担当した官吏〕である。産業化による依存経済体制にある私たちが国際舞台で活動するためには、海外僑胞の才能と経験を十分に活用しなくてはならない。何よりも南北統一課業に海外僑胞を活用せねばならない³¹。

90 年代末に韓商大会や韓人会長大会などの

様々なイベントが開催されるなか、「韓民族共同体」あるいは「韓民族ネットワーク」という語が好まれたのも、こうした経済危機と世界市場への流入が背景にある。民族問題と経済問題は密接に結びつき、統一問題は「韓民族の生存戦略」と深く繋がっている。ここには「全世界の韓民族が同一民族であるという認識の下に幅広い交流を続けると離散家族問題を自然と解決し、南北の平和的統一にも接近」³²するだろうという楽観的な展望があった。

以上のように民主化を経た 90 年代の韓国社会で在外同胞たちは再認識された。特に 80 年代まで忘れられた存在であった中国と旧ソ連の同胞たちの登場によって、「在外同胞」は文字どおり発見された。いくつかの点を加味しつつ 90 年代後半の特徴を整理すると次のようになる。

第一に、在外同胞法改正をめぐる論争のなかで、政府と市民団体の関係が監視と牽制ではなく、協調と諮問の段階に移行するなかで在外同胞問題が 이슈として浮上した点である。在外同胞問題の代表的研究者であり、「ウリ民族助け合い運動本部」共同代表でもあった李光奎がその後外交通商部傘下の「在外同胞財団」理事長となり影響力を発揮したこともその一例としてあげることができる。

第二に、経済危機を経験した韓国政府が全世界にまたがる在外同胞を包容して国家発展に活用するという必要性を本格的に感じはじめたと

²⁹ 国家安全企画部、前掲書、294~295 頁。

³⁰ 李光奎「IMF 時代に 생각하는 在外同胞政策」『統一韓国』第 170 号、1998 年。

³¹ 李光奎「海外僑胞과 韓民族共同体」『叢書 1 民族統合과 民族統一』翰林大学校民族統合研究所、1999 年。

³² 国家安全企画部、前掲書、308 頁。

いう点である。こうした包容政策は棄民と安保、監視を基調とした過去の韓国政府の在外同胞認識に対する反省から始まったと見られるが、韓国中心の一方的な視点から在外同胞をまなざすという点では過去のそれとさほど変わりがない。経済的価値が優先される限り、利用価値の少ない在外同胞は排除されるほかないからである。

2 「脱冷戦」期における在日朝鮮人認識

こうして発見された在外同胞は、その後「脱冷戦」と呼ばれる時代的雰囲気の中でいかに認識されたのか。ふたたび在日朝鮮人に焦点を合わせて見てみよう。

2000年6月15日の南北共同宣言は、南北統一に対する認識とともに在外同胞に対する認識にも大きな影響を与えた契機となった。特に総連と民団が対峙するなかで直接的な分裂を経験した在日朝鮮人は、南北関係を象徴する尺度となりうる。もっとも大きな変化は、分断の足枷が少しずつ外れることで、総連系の在日朝鮮人と韓国社会との接触が増えはじめたことである。6.15宣言で南北の二つの政府は、総連系在日朝鮮人50名の韓国訪問を許可した。ハンギョレ新聞は、過去の総連系同胞たちを「韓半島冷戦体制の犠牲者」であるとして、彼／女らの母国訪問が本格的な民族和解と協力の基盤をつくったと高く評価した³³。

先に言及した市民団体の KIN では、1999 年から「朝鮮籍」在日朝鮮人の韓国入国キャンペーンを持続的に展開した。在外同胞問題に「歴史と人権の視点から」取り組む KIN の活動は、韓国社会が冷戦と分断に規定された在外同胞認識から脱するうえで一定の役割を果たしたと見られる。この時期に韓日民族問題学会などをはじめとする学界においても、在日朝鮮人に関する研究があらわれ、その過程で金石範や李恢成の文学作品だけでなく、尹建次、徐京植、姜尚中、辛淑玉など、在日2世の知識人たちが積極的に紹介されはじめた。また『GO』をはじめとする在日朝鮮人を描いた商業映画が韓国にも紹介されることで、韓国社会の一般的な認識と関心は過去に比べて急速に増幅していった。

この過程で特に目に付くのは、大衆メディア、特にテレビで在日朝鮮人が積極的に紹介され、徐々に大衆化していった点である。2000年以降民放3社では一時間程度の在日朝鮮人に関する特集番組を放映しはじめたが、管見の限りその数はざっと50本以上にのぼる。2000年以前のいくつかの事例からは、「在日同胞」「在日朝鮮人」の問題があくまで「朝総連」と関連づけて放映されたことが分かる。これは冷戦的な視座から脱して「朝総連の人々」の現実を知ろうとする当時の韓国社会の過渡的な問題意識をあらわしたものと見られる³⁴。

³³ 「(社説) 全世界韓民族 和合契機 斗길」『ハンギョレ新聞』2000年9月24日。

³⁴ たとえば、「北送僑胞、その後35年：6.25特集」(MBC、1994年)、「朝総連の今：光復50周年特集」(MBC、1995年)、「朝総連の人々：二つの祖国、彼らの選択」(SBS、1997年)など。こ

では、2000 年以降にはどのような視座を読み取ることができるのか。先に述べたように、権赫泰は、韓国社会と在日朝鮮人のあいだに「反共主義」「開発主義」「民族主義」という三つのフィルターがあることを明らかにし、最近このフィルターには著しい変化が生まれていると指摘した。ここでは権の分析枠を前提に最近の韓国社会の在日朝鮮人認識を確認してみると、まずは「脱冷戦」と「民族和解」を時代背景とする 2000 年代の在日朝鮮人表象は反共主義的なフィルターからある程度自由だという共通点を見出すことができる。またグローバル化と韓流などによって韓日間の経済的、文化的交流の非対称性が解消され、日本に対する開発主義的なフィルターも弱まるしかない。では韓国でも在日朝鮮人社会でも世代交代がすすんでいる現在、同じように民族主義フィルターも弱まったといえることができるだろうか。もちろん過去とは違って、在日朝鮮人を露骨に“パンチョッパリ”〔半日本人〕と見ることはなくなったかもしれない。しかし軍事独裁期の遺産であるともいえる反共主義と開発主義に比べ民族主義は依然として韓国社会を強力に規定する理念であり心性である。後に見るように、民主化と経済成長を成し遂げた分断国家において、反共・開発主義の

弱まりは、むしろ民族主義をより普遍的に再編成していく契機ともなりうるのである。以下では、多様な幅をもつ民族主義の作用のあり方に留意しながら大衆メディアから読み取れる在日朝鮮人に対する認識コードを三つの流れにまとめて検討していく。

1) 「誇らしい韓民族」

興味深いのは、2000 年以後の各放送局で、「韓民族レポート」(KBS)「統一展望台」(MBC)といった番組が開始され、ここで著名な在外同胞たちが多数紹介されはじめたことである。こうした番組の始まりは、6.15 南北共同宣言を背景にした民族和解と統一思考的雰囲気を反映している。ここで紹介される素材は、「北韓の真のすがた」そして世界各地にいる「誇らしい韓国人」である。

特に「韓民族の祖国愛と民族的自負心、勇気を鼓吹」する趣旨でつくられた KBS「韓民族レポート」は視聴率の程度にかかわらず、視聴者たちの爆発的な反応を引き起こした。視聴者掲示板には毎回「韓国人であることが誇らしい」「私は民族と祖国のために何をしたらだろうか」などの数多くの感想が書き込まれた。いみじくも担当プロデューサーが書いているように、「IMF と息苦しい国内の現実にくさぎこんでいた視聴者」たちが世界各地で活躍する同胞たちを見て「勇気と活力」を得たのである³⁵。

のうちの一人の放送プロデューサーは、自ら「反共教育を着実に受けてきた思想健全な大韓民国青年」としながらも、「朝総連と民団の対立構図ではない在日同胞の問題」として総連にアプローチする立場から製作したという。チョン・ギルファ「이제는 그들에게 가까이 다가설 때——PD 手帳『朝総連의 今日』制作記」『月刊 放送と視聴者』1995 年 9 月。

³⁵ 「KBS 韓民族レポート 조용한 人氣몰이」『京郷新聞』

「韓民族リポート」で紹介された在日朝鮮人は、李進熙（史学者）、金洪才（指揮者）、金敬得（弁護士）、李政美（歌手）、申淑玉、趙博（歌手）など一定の知名度のある人々である。日本で生活しながらの苦勞と彼／女らの哲学を映像を通じて伝えるその内容は、韓国社会の在日朝鮮人認識に一定の影響を及ぼしたであろうと推測される。しかし留意しなくてはならないのは、この番組が涙と感動を与えたのは、そこに登場した在日朝鮮人がただ異国で成功して名を馳せたからではなく、彼／女が「韓民族に対する自負心で愛情」を抱きながら堂々と生きる姿を見せてくれるからである。番組の趣旨もそうであるし、視聴者たちもそのフレームのなかで民族的矜持を高めてくれる人物選定を期待する。こうした調和が崩れるとき、視聴者たちは不満と当惑を表出する。

在日3世のデザイナーである韓安順氏を紹介した回では、彼女が世界的に成功したデザイナーであるにもかかわらず「誇らしさよりも失望が先立つ」といった意見、これに同意する意見が相次いだ。なぜなら彼女からは民族愛を見つけられないばかりでなく「韓国人であることを誇らしく思ってブランド名を“Han Ahn Soon”にしたのではなく、ただその音の可愛さで選んだ」という理由のためである。また他の視聴者は「日本人のような顔」に、なんとなく拒否感を覚えるという。この番組の人気の秘訣は、た

だ在外同胞の成功と活躍にあるのではなく、そうした同胞たちがまさに祖国である“ウリ大韓民国”を渴望しているという事実を確認することにあつたといえる。

2004年に終了するまでこの「韓民族リポート」は数百名の在外同胞たちの現実を紹介し、見る者たちに熱い感動を与えたが、この感動は愛国心と民族的自負心を呼び起こすことのできない日本人のような大部分の在日朝鮮人を除外して成立可能なものであつた。番組終了を惜しむ視聴者の一人は、この番組を見ながら「夢を育て人生計画を立てた」という。ここで在外同胞たちは、韓国人のための韓国人の夢に代理満足を提供する存在に他ならなかった。

多様な在外同胞たちを紹介する番組自体が2000年以降に出てきた流れを考えると、こうした試みは、IMF以後の政府レベルで推進された「韓民族ネットワーク」政策を大衆レベルで遂行したものであることがわかる。「海外韓人たちはもう単純な好奇心や憐憫、または羨望の対象ではない、一つのエネルギーである。今後韓国が世界にはばたいていくうえで、尖兵の役割をしてくれる貴重な資源であるという認識が切実な地点にきたのである」³⁶。この趣旨文からは、韓民族ネットワークを完遂させるうえで「粘り強い生命力と不屈の意志」をもつと同時に、祖国愛と民族愛を兼ねそなえた在外同胞たちの存在が束ねられねばならなかったことがわかる。

2000年5月15日。

³⁶ KBS サイト「韓民族リポート」番組紹介文。

「韓民族ネットワーク」構想の前提に過去の反共主義と開発独裁からの脱却を読み取るならば、反共／開発フィルターの弱まりがまさに民族主義フィルターを補完する機能を果たしたといえるだろう。

在外同胞財団が実施した世論調査によれば、「真正な韓国人になるための条件として何をもっとも重要に考えるか？」という質問に対し、「国籍」17.2%、「血統」15%、「韓国語使用」7.6%、「韓国居住」3.2%に対し、「自負心と意識」が56.9%を占めた³⁷。「真正な韓国人」という本国中心的な設問自体が韓国社会の同胞認識を象徴的にあらわしており、「自負心と意識」という応答もまたその枠組みに適合的に設定されている。この調査は2007年に実施されたものであることから、「誇らしい韓国人」という枠組みは、現在までも強力に作動している。

2) 韓流のなかの「ザイニチ」

2002年に権赫泰は、韓国社会で「^{チェイルチョンジン}在日朝鮮人」という言葉が含んでいる前提と「ザイニチチョウセンジン」という響きにある歴史的現実の乖離を指摘した³⁸。権が分析したように、呼称が一定の政治的志向性と歴史性を内包するものである以上、在日朝鮮人をあらわす呼称の選定が韓国社会の認識を知るうえで重要な端緒を提供

する。ところで最近目立つのは、韓国語での「^{チェイルチョンジン}在日朝鮮人」と日本語での「ザイニチチョウセンジン」の乖離を飛び越えて、「ザイニチ」という呼称を韓国社会が積極的に使いはじめた点である。

記事に「ザイニチ」という語が登場するのは2001年頃である。主に日本に住む韓国人の知識人や特派員などが在日朝鮮人当事者の声を紹介する文脈であらわれた。より大衆的な次元で「ザイニチ」が談論化されるのは、若い世代の在日朝鮮人の姿を描いた映画『GO』『青〜chong〜』『あんによんキムチ』『パッチギ!』などが韓国にも少しずつ紹介され、若い世代のアイデンティティが関心の対象として浮上してからである。つまり、「誇らしい韓国人」という枠を大幅にはみだす若い世代の現実が、「民族」「同胞」パラダイムに修正をせまった。朝鮮語を知らない、キムチを食べられない「同胞」を理解するためのキーワードが、まさにアイデンティティであり、「ザイニチ」なのである。

したがって多くの場合、「ザイニチ」は国家と民族に縛られない自由な生き方を模索する新世代の姿として描かれる。特に映画『GO』にあらわれた“カッコイイ”異端児の姿は、これまでの在日朝鮮人のイメージとは違う痛快さを与えたようである。主人公のいう「コリアン・ジャパニーズ」という呼称もまた、その痛快な新世代のイメージとぴったり合うものであった。

韓国版『ニュースウィーク』では、若い世代

³⁷ 「在外同胞에 관한 内国人意識調査」2007年。在外同胞財団サイト www.okfor.kr 参照。

³⁸ 権赫泰「『ザイニチチョウセンジン』과 『^{チェイルチョンジン}在日朝鮮人』 워크숍」『post-colonial 時代와 在日朝鮮人』(於: 淑明女子大) 報告文, 2003年2月。

の在日朝鮮人に関する特集を組み「旧世代の在日コリアンたちを苦しめてきた偏見と劣等感から脱却しようとする、新たな意識を持つ若者」たちをコリアン・ジャパニーズ、あるいは「ニューザイニチ」と呼んだ。そして彼／女たちの姿を紹介しながら、日本社会の「変化」を次のように説明した。

民間次元では「最大の少数民族」に対する日本人の姿勢が昔よりもずっとよくなった。……日本の多くの若者たちは、1988年オリンピックを主催した国、日本とワールドカップを成功裏に共同開催した国、日本で知られる歌手や俳優、ポップスターたちの故郷である韓国を「カッコイイ」と感じるようになっていく³⁹。

その証拠として続々とできる韓国式居酒屋、そして「沖縄を訪れるように気楽に済州島旅行を楽しむ」数多くの日本人たちの存在を挙げている。つまり韓流ブームで韓国食を食べ自由に韓国を旅する日本人が登場することで、在日朝鮮人の立場がずいぶん楽になったというのである。ここには在日朝鮮人を日本「最大の少数民族」として外部化しながらも、韓流の恩恵を受ける韓国人として内部化する二重の視線が見出せる。また、「在日コリアンの大多数は内心どうであれ同化の道を選択してきた」「いずれにせよ

若い世代は帰化を選択している」といった論調からは、日本社会の同化圧力や長いあいだそれを放置してきた韓国政府や韓国社会に対する問題意識はまったく見当たらない。

テレビでも2004年前後を境に各放送局で「ザイニチ」特集が数多く組まれた⁴⁰。ここでの内容にも韓流ブームと関連づけながら、若者たちの多様性を描くという特徴が見られる。「国籍や民族を超えてアジアに向かう視座が“ニューザイニチ”の条件である」（「ニューザイニチ、梁邦彦」MBC、2006年）。これは一見すると脱民族／脱国家を志向しているようにみえるが、決して「民族意識」を持たない人々が該当するわけではない。「自身のルーツについての自負心を持つが、父母世代のように国籍や血統にこだわらない」という文化民族主義を実践する人々である。「新」「ニュー」というとってつけたような飾りもまた、在日朝鮮人社会の世代差を浮彫りにするために必要なのであった。

こうした傾向は、「在日3世」のアイデンティティの多様化を積極的に議論した90年代の日本社会の状況と相通ずるものがある。多文化主義をめぐる議論に大きな影響を与えたチャールズ・テイラーは、公的領域において、普遍的尊厳をめぐる政治（「平等な承認」）と、差異をめぐる政治（「アイデンティティの承認」）が同時

³⁹ 韓国版『Newsweek』2003年12月号。

⁴⁰ 「ザイニチ3世、私は何者か?」「あやしい外国人、ザイニチ」（MBC、2004年）「若い在日同胞・ニューザイニチの新たな選択」（SBS、2004年）、「ニューザイニチ梁邦彦」（MBC、2006年）、「新ザイニチ」（KBS、2006年）など。

に生じていることを指摘し、「差異を顧慮しない中立的な一連の諸原則」なるものが存在しないことを論じた⁴¹。このような「差異の政治」はポストコロニアリズムなどの潮流とともに問題化されてきたが、同時にそれがナショナルな空間への「包摂」を前提としたものであることも次第に明らかにされてきた。なるほど韓流ブームによって、在日朝鮮人は日本社会でエスニシティを表出しやすくなったであろうし、民族的なプライドを取り戻すこともあるかもしれない⁴²。しかし名前や出身などの差異の承認が日本社会の「寛容」を担保し、その枠を超える人々に対する排除の実践を正当化する事例は、今日の日本社会のあちこちに見出すことができる⁴³。それは岩淵功一の言葉を借りれば「忘却のための承認」に等しい。

近年の韓国社会における「ザイニチ」像は、こうした日本社会のネオリベラルな多文化主義に対する認識を欠いているだけでなく、むしろ「同胞」たちの記号化を積極的に奨励しているように見える。繰り返すが、韓国社会において「ザイニチ」とは、国籍にはこだわらないが自らの

ルーツが「コリア系」であることに誇りを持つ限りに於いて容認される。それは日本社会の「コリア系日本人化プロジェクト」(宋安鐘)と隠微な共犯関係をなしつつすすめられる。文化的・経済的な日韓交流やアジア交流の文脈をはみ出さない、あくまで国民国家の枠組みを脅かさない流通可能な存在として、「ザイニチ」は表象されている。

3) 朝鮮学校と「ウリ」の再／発見

ところで、「ニューザイニチ」として紹介された作曲家の^{キム・ボンギン}梁邦彦や歌手のソニンが朝鮮学校出身者であることは、韓国社会でさほど重要ではないように見える。彼／女が自らを「韓国人」と呼び、韓国を「祖国」、北朝鮮を「北韓」と表現することを自然なこととして受け入れる。たとえば「統一旗」を振る「朝総連ボクサー」として紹介された^{キム・チャンソク}洪昌守とはちがって、彼／女たちには「北韓」「総連」というラベルが最初からなかったからである。

今日の韓国社会には数多くの「総連系」⁴⁴在日朝鮮人が住んでいる。ほとんどの場合、父母や祖父母の出身地は南側にあり、また国籍もすでに「韓国」であるため、客観的には韓国を祖国、そして自分自身を「韓国人」と表現することは自然に見えるかもしれない。しかし韓国社

⁴¹ C. テイラー「承認をめぐる政治」、C. テイラー／J. ハーバース編著(佐々木毅ほか訳)『マルチカルチュラルイズム』岩波書店、1996年。

⁴² たとえばイ・ハンジンや岩淵功一の研究は、在日朝鮮人がそれぞれの動機から韓流に接するなかで人生に広がりを持ったこと、「韓流の果たした役割が、日本人女性の自分探しだけにどまらないこと」を論じている。イ・ハンジン著(清水由希子訳)『韓流の社会学——ファンダム、家族、異文化交流』岩波書店、2008年参照。岩淵功一「韓流が『在日韓国人』と出会ったとき」毛利嘉孝編『日式韓流』せりか書房、2004年。

⁴³ この点については、宋安鐘『「コリア系日本人」化プロジェクトの位相を探る』『現代思想』2007年6月、そして宋の分析のもとになったガッサン・ハージ著(保刈実／塩原良和訳)『ホワイト・ネーション』平凡社、2003年参照。

⁴⁴ 韓国社会において「朝総連系」という語は、「朝鮮籍」を保持した組織専従者だけでなく、朝鮮学校出身者やその家族など実に恣意的に用いられているが、ここではその使用法について深く立ち入らないでおく。

会と朝鮮学校の関係を歴史的に紐解いてみると、そこに深く暗い溝が見え隠れするということは本稿でも見てきたとおりである。たとえ今日の韓国社会が冷戦・分断的な思考からある程度自由になったとはいえ、長いあいだ烙印を押されてきた側はその視線からそれほど自由ではない。そのため朝鮮学校出身者たちは韓国社会と接する最初の時点で、「北韓」「朝総連」のラベルをはがそうと自ら規制し、自身の故郷が南にあるという事実を強調しようとする。この意識的／無意識的な態度が、これまで韓国人と「総連系」在日朝鮮人との関係を安定的に維持するうえで一定の役割を果たしてきたと思われる。

ところが映画『ウリハッキョ』の人気と朝鮮学校支援運動などを通してあらわれる関係性は、これまでのそれとやや次元を異にしている。ウリハッキョに通う子供たちが知る韓国社会はすでに民主化された豊かな社会であり、メディアを通じて日常的に慣れ親しんできた社会である。烙印から自由になりつつある子供たちは、朝鮮学校で習う言葉や文化（もちろん以前とは違って多分に「韓国化」した状態ではあるが）を、ためらいなくそのまま表現することもある。自分自身を「朝鮮人^{チョソンジン}」、韓国人を「南朝鮮のトンム^{ナムチョソン}〔友〕」と表現する学生たちの姿を今の韓国社会はむしろ新鮮に受け止める。次の評論家の言葉は、それをうまく伝えてくれている。

ひとつひとつに感動する朝鮮学校生徒たちの姿から、南の観客たちは骨の芯まで資本主義的人間になってしまったわれわれの失われた精神、純粋な愛国心あるいは民族意識の真髄を再／発見する。この映画はすべてのものが金の価値に換わる現実慣らされてしまった南の観客に、われわれが喪失したものを喚起させ、想像的に補償する郷愁映画としての機能を果たしてくれる⁴⁵。

総連組織の存在は、韓国社会で長いあいだ国家機関に他ならなかったし、生身の人間の姿が隠蔽されてきた。国家体制によってこれまで隠されてきた人々が明らかになる過程は、まさに「脱分断」が現実化する過程であり、そこでの出会いは過去からの解放の契機となりうる。こうした意味において筆者は、その出会いからくる感動を否定することはできない。それは隠されてきた側もまた同じである。

しかし、ここで朝鮮学校の学生たちが「韓国社会が失ってしまった純粋さ」を埋める存在として見なされるとしたら、これまでの非対称的な関係性を超えることはできない。もちろん映画を見た観客は自己省察をするだろう。「さんざん泣いた後に彼女はうつろなまま“私は一体今まで何をしてきたんだろう？”と当惑したように言った。そう、私はなぜ正体性〔アイデンテ

ィティ] という言葉の前で彷徨うしかなかったのだろうか?」⁴⁶。「明るく笑う子どもたちを見ながら、私はこれまで何をしてきたのだろうと思った。私は韓国の地で、……生きてきたのに、いまだに自分自身を見つけれない理由は何であろうか?」⁴⁷。しかしこうした「自分探し」による感動はカタルシスにとどまるほかない。

映画『ウリハッキョ』をはじめとする韓国の放送にあらわれる朝鮮学校の姿は、あくまで韓国人撮影者が韓国的な視座から韓国の観客に向けて撮った結果物である。つまり子どもたちの民族的自負心や純粋さの表現は、韓国人監督との相互作用のなかで生まれた産物である。いうまでもなく国家保安法が厳存している韓国社会と、公式に朝鮮民主主義人民共和国の方針に従う朝鮮学校は、いまだ政治的な緊張関係にある。朝鮮学校をあれほど愛情豊かに撮影できるまで、学生たちや教師たちとの関係づくりが、どれほど慎重さと根気の要る作業であったのかは想像して余りある。

しかし映画は監督と関係者たちの「出会い」がすでに出来上がった状態で始まる。はじめその関係は若干のよそよそしさをかもしだすが、それも微笑ましい程度である。観客は最初から居心地の悪さを感じることなく、朝鮮学校の同胞たちと「出会う」ことができ、中盤にマンギ

ョンボン号に乗って祖国訪問に発つ場面は居心地の悪さよりもむしろ悲劇的な感動さえ与える。このようによくできた構成と展開は、長いあいだの韓国社会と朝鮮学校の分断線をむしろ忘却させるようである。代表的と見られる観客の反応は以下のようなものである。

イデオロギー?

そんなのはよく分かりません……。

もともと一つであった心に戻って映画を見れば韓民族の緒を発見できます。

そこには、韓国の未来がありました。

韓国人ならば熱い涙を流すでしょう。

本当にそれは狂おしく熱いものでした⁴⁸。

この映画が与えてくれる感動は、朝鮮学校が抱える問題や、それに対する違和感やぎこちなさを一気に飛び越えて、「ウリ」を新たに発見させる。このとき朝鮮学校という対象は、「韓国人」に吸収され、韓国人のアイデンティティを強化する役割を果たす。朝鮮学校との出会いは、歴史的に形成されてきた「大韓民国国民」というアイデンティティを解体し瓦解させる契機を含むはずであるのに、むしろこれをより拡大強化させるという逆説を見出せるのである。

韓国社会はもはや在日朝鮮人を露骨に「パンチョッパリ」と、つまり欠如した存在と見るこ

⁴⁶ 映画『ウリハッキョ』公式ブログ
<http://blog.naver.com/ourschool06> から抜粋。

⁴⁷ Yahoo Korea ブログ「ウリハッキョ感想文」
<http://kr.blog.yahoo.com/sumloss/6041> から抜粋。

⁴⁸ Naver 映画『ウリハッキョ』レビュー。
<http://movie.naver.com/movie/bi/mi/point.nhn?code=63445> から抜粋。

とはない。その代わり彼／女らを過剰な存在と見て、周辺部に固定させ、その鏡の効果として内部的一体感を想像させるのである⁴⁹。こうした非対称性は、「失われた片方」である総連系在日朝鮮人との出会いのなかで顕著にあらわれる。他方で、「ウリハッキョ」に通うことのなかった在日朝鮮人たちに沈黙を強要したりもする。民族教育を受ける機会がなかった大多数の在日朝鮮人たちは、まさに韓国政府の歴史的産物でもあるにもかかわらずである。

こうした認識と関係性から自由になることはそれほど簡単なことではない。しかしたとえ時間がかかったとしても、離散と分断、それによる相互疎外や烙印の痕跡を忘却したり、希釈したりする前に、その記憶と向き合う過程がまず必要である。歴史なき安易な同一化は、次々と別の対象を誘い出し「ウリ」を補充していくだろう。むしろ互いの違和感と異質感にとどまり、それを掘り下げる忍耐力が必要な時なのかもしれない。

おわりに

本稿では、韓国社会の在日朝鮮人認識の変遷過程を検討した。90年代以後の韓国社会の急速な変化のなかで、在日朝鮮人は過去の棄民と監視の対象から支援と連帯の対象へ、(その裏面としての)動員と郷愁の対象へと更新されてきた。

こうした認識の枠組みは相互浸透しながら今日の在日像をつくりあげている。同時に本稿は、歴史的につくられた認識主体としての韓国社会と対象としての在日朝鮮人という関係の非対称性を浮彫りにする試みでもあった。

他方、近年の韓国社会と在日朝鮮人のあいだにある現実、すでに固定的な関係性をはみだしつつある。韓国社会は過去を克服するための歴史清算活動の一環として在外同胞たちとの連帯活動をすすめており、また韓国に自ら「帰還」する多くのディアスポラたちの選択もまた、国家から疎外されてきた過去の奪還という次元でとらえることができる。本稿はこうした力動的な相互作用の現実に触発された批判的な状況認識の産物であり、さらなる対話に向けた一つの問題提起である。

(ちょう きょんひ・聖公会大学非常勤講師)

⁴⁹ 藤井たけし「*조선 帰還: <歴史>를 攪乱하는 유희*」『人文研究』第52号、2007年、37頁。